第三表　第一次題材要因による題材分類表

性別	No	I	II	III	IV	乗物	家	火事	その他
男子	1	80%	78.6%	77	95%	—	—		—
	2	88	84.6	84.4	100	—	—		—
	3	80	100	100	100	—	—		
	4	50	63.4	70	50	—		—	—
	6	36.3	38.4	80	63.6	—		—	
	8	30	28.4	72.5	59.2	—	—	—	
	9	90.8	58.6	54.4	56.2	—	—	—	
	11	36.2	71.3	92.2	70.6	—	—		—
	12	91.6	100	100	93.2	—	—		
	13	85.7	46.2	60	62.5	—	—		
	15	60	33.3	81.7	39.9	—	—		
	17	45.3	42.8	54.0	63.5	—	—	—	
	18	71.4	85.7	84.6	94.4	—	—		
	19	66.6	25.0	83.3	56.2	—	—		
	22	100	40	7.7	74.9	—	—	—	
	23	100	61.5	66.5	84.1	—	—		—
	25	100	100	100	77	—	—		—
	26	45.4	38.4	92.3	93.7	—	—		
						人形	家	植物	その他
女子	5	45.3	58.2	91.7	72.2	—	—		
	7	22.2	71.4	38.4	95.3	—	—		
	10	90.8	92.2	100	37.4		—	—	—
	14	81.7	38.4	91.6	100	—	—		
	16	54.4	84.9	66.6	73.6		—	—	
	20	0	45.4	100	64.2		—		—
	21	45.3	49.9	100	57	—	—	—	
	24	43	66.8	100	91		—	—	
	27	36.1	49.8	77.7	50	—	—		—
	28	80	80	68.4	55.4	—		—	—

か」という質問に対する解答によれば、男子の場合、約八〇%が果物、家、動物を、女子の場合、約六〇%が人形、花、家、動物を書いて与えて居り、前記児童の題材分類とよく一致して居る。この二つの間に相関関係があるとは必らずしもいえないが、親自体の考えが既に相当程度概念が固定化している傾向のある事は見逃せない事実である。

以上綜合して、家庭、社会環境の整備を通じて行われる教育は勿論極めて大切な事であり、特に両親教育などは固定概念打破の上に或程度有効であるが、これとても現実の問題としては限度があり、此処に問題が存在するのである。自由に描かせておいた丈では前記の如く決して創造性は培われるる。今後の問題は、学校教育の限度内で、環境整備及び適当な技術指導の方法を充分研究して実施する所にあると思われる。ただ私の此処でいう技術指導が決して従来の様な概念的なものではならない事はいう迄もない。

幼児の遊びに対する親の態度

愛育研究所
竹田俊雄

こゝに報告する研究は、幼児の遊びに関する調査の一部分で、幼児の遊びに対して、その親がどのような考え方をしているかを明ら

かにしようとするものである。

研究の対象とした幼児は三才から六才までの男女合計一一九六名で、それは無作意抽出法によるものではないが、日本の各地方にわたっている。その生活する地区が人口十万以上の都市をA地域、人口十万以下の都市をB地域、町村をC地域と名づければ、調査児童数は第一表のようである。（頁数の都合により第一表省略）

調査の方法はその幼児の親に面接質問する方法で、調査員は心理学の教養をもった女子学生である。その質問はいろいろの項目にわたっているが、今ここに報告するものは、

一、させたくない遊びがあるか

二、遊び場所で困っていることがあるか

三、遊び友達で困っていることがあるか

の三項目について調査した結果である。なお調査の時期は昭和二十九年七月―八月である。

第一　させたくない遊びについて

親がその子に対して、させたくない遊びがあるか。「ある」は、第二表のように、男児では平均六六・八％となっていい、女児では平均四六・九％となっているが、これを年令別に見ると、三才男はやや少いが、四才男以上は多く、女児は年令の上になるにつれて、減少の傾向が見える。しかし地域差については、男女とも著しい傾向が見られない。（頁数の都合により第二表省略）

そしてどのような遊びを、特にさせたくないと考えているかを示すものが第三表であるが、この中でやや多くの親に指摘されているのは、男児では「ちゃんばら、戦争ごっこ」と「かけごと」であり、女児では「水遊び」である。

第 3 表

	男	女
		%
のぼる遊び	4.3	1.6
力をきそう遊び	0.7	0.0
ものを投げる遊び	4.3	0.3
花火	2.7	1.6
ちゃんばら・戦争ごっこ	21.6	3.0
(単に)危険な遊び	5.4	4.1
泥棒ごっこ・ことギャングごっこ	3.6	0.5
かけごと	10.7	1.0
性的な遊び(医者ごっこを含む)	0.9	6.4
お金を使う遊び	0.2	0.8
水遊び	7.8	10.5
紙芝居	0.9	1.0
お・いと文化の生活ねじめるの遊び	0.7	1.8
いそのの他の遊び	0.9	0.3
遊びの場所	2.2	2.1
遊びの相手	9.5	8.2
	0.5	4.6

（％は調査児童数に対するもの）

第二　遊び場所について

こどもの遊び場所について、親が困っていることが「ある」というのは、第四表のようで、平均で男児三六・七％、女児三二・四％の程度である。年令的には四才児がもっとも多く、年長になるにつれ、やや減少を見せている。地域差については、A地域の男児がやや高いが、顕著ではない。（第四表省略）

遊ぶ場所のどんな問題で困っているか、親の表現を要約すると第五表のようであって、「遊ぶ場所がない・少い・ほしい」というのが平均しておよそ一四％程度であり、それをやや具体化して「身体的に危険な場所で遊ぶ」というのが、男児では一九％あまりとなっている。年令差も地域の差も比較的に少い。（年令差の図表省略）

第三　遊び友達について

こどもの男び友達について、親が困っていると考えているものは、男児で平均四二％程度であり、女児で平均三五％程度である

第　5　表

	男				女			
	A	B	C	平均	A	B	C	平均
遊ぶ場所がない・少い・ほしい	15.9	13.2	11.7	14.1	17.9	13.5	10.9	% 14.5
身体的に危険な場所で遊ぶ	19.0	15.4	22.2	19.2	9.5	13.9	19.7	13.7
衛生的に　〃	0.3	0.0	0.0	0.2	0.4	0.0	1.0	0.5
性格形成上好ましくない場所で遊ぶ	0.3	0.0	0.0	0.2	1.5	1.5	0.5	1.2
おとなの生活を妨げる場所で遊ぶ	2.1	2.2	1.2	1.9	0.0	0.7	0.0	0.2
その他	2.1	1.5	1.8	1.9	3.7	1.5	1.6	2.5

が、年令的には女児の三才児がやや顕著である。また地域的にA地域よりもC地域の方が多くなっている。これは第六表に見る通りである。（第六表省略）

男び友達のどのような問題について困っているかは、第七表が示すように種々であるが「友達がない、できない、少い、大ぜいと遊ばせたい」というのが、殊に年少児に多く、次には「友達が性格的に問題をもっている」

「友達と遊ぶと問題行動をする」とかいうものが見出され、男児の「友達が年長」というのも多分にこの傾向をもっている。

これら三つの項目についての調査から見られることは次の諸点である。

(イ)　親はこどもにさせたくない遊びについてもっとも関心をもっ

第　7　表

	男					女				
	3才	4才	5才	6才	平均	3才	4才	5才	6才	平均
友達がないその他	16.0	12.6	10.0	7.6	11.2	13.6	6.4	8.2	7.3	8.2
仲間はずれにされる	0.0	0.5	0.5	0.0	0.3	0.0	0.0	0.4	0.8	0.3
友達が多すぎる	0.0	0.0	0.0	1.0	0.2	0.0	0.0	0.0	0.8	0.2
友達と遊ぶと問題行動をする	2.5	4.2	7.1	3.8	4.9	8.6	7.0	6.9	5.7	6.9
友達が年長	8.6	8.4	10.4	9.5	9.4	2.5	4.1	1.3	3.3	2.6
友達が年少	0.0	0.0	0.5	0.0	0.2	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
性の異る友達と遊ぶ	1.2	0.5	1.4	0.0	0.9	12.3	8.8	4.7	4.0	6.7
友達が性格的に問題	12.3	12.6	7.1	16.2	11.2	4.9	6.4	9.9	10.6	8.4
友達が知能的に問題	0.0	0.0	0.5	0.0	0.2	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
友達が身体的に問題	1.2	0.0	1.4	0.0	0.7	2.5	0.0	0.4	0.8	0.7
友達が経済的問題	0.0	1.0	0.0	1.0	0.0	2.5	0.0	0.9	0.8	0.8
身分的にその他	2.5	3.1	4.7	4.8	3.9	0.0	1.2	2.6	2.4	1.8

てい、遊び友達の問題がその次であり、遊び場所の問題が第三になっている。

(ロ) しかしその遊びに対する関心の度は保育関係者が期待するほど高くないように思われる。(これについては保育関係者の態度の調査を必要とする)

(ハ) 困った遊びも身体的に危険という面が比較的考えの中心になっていて(例——男児のちゃんばら等と泥棒ごっこ等)、性格形成の問題はあまり考慮されていない。

(ニ) 遊び友達については年少児では友達のないことが問題とされているが、年長児では問題行動がおそれられている。

(ホ) 遊び場所については地域差による態度の差があまり見られない。

(ヘ) 幼児保育の立場から、遊び場所その他について親の一そう関心をもたせる必要があり、遊びの効果や友達についての正しい理解をもたせることが一段と望まれる。

なおこれらの結果および意見はこの遊びの調査の他の部分と関連させて考えられねばならない。

保育学における現在的関心の問題

東京都立大学

三井為友

昭和二十二年の第一回保育学会大会いらい今回の第八回に至るまでの研究発表題目は、シンポジウムも含めて百二十二題目になる。これを凡そその研究内容に従って類別すると、その種別の頻数は次のようになる。

A、幼児教育の周辺を問題にするもの(即ち、施設・保育者・両親等)……一八

B、幼児の身体にかんするもの(保健・養護等をも含めて)……一八

C、保育カリキュラムにかんするもの(保育内容の取扱いをも含めて)……二一

D、幼児心理に関するもの(テスト等をも含めて)……三六

E、保育方法にかんするもの……二六

F、保育学評論にかんするもの……三

つぎのグラフでは、これを大会の回数別に増減の状況をあらわしてみた。(表は頁数の都合で省略)

ここから凡そつぎの三つの問題を考えてみる必要がある。

1. 学会大会での発表は、必ずしもその学問領域での全般的な傾向をあらわしてはいない。医学会や法学会などについては、全般的傾向を代表する色彩が可成り濃厚に見られるが、他の方面では時間的・地理的制約が相当強く働いて、学界の一部の動向しかあらわれて来ない場合が多い。保育学のばあいもこの例外ではないが、出来るだけ色々な制約を破って、その学問全般の傾向を代表するような方向へ持ってゆきたい。

2. 八回の学会大会の集計にあらわれたところをみると、第一位